

歌神・歌聖

—人麿像を中心に—

榊原吉郎

本学所蔵の土佐派絵画資料は、一般に粉本と呼ばれている絵画の下絵や小下絵などの他に十六世紀中頃に写生された草花の写生帳等を含み、土佐派の絵師たちにとって大きな価値を有していたものである。

十七世紀に近世土佐派を復興した土佐光起が記した『本朝画法大伝』によれば、土佐派の絵師にとって、粉本を蓄え置くことの重要性を指摘し、粉本が宝の第一であるときえ記す。従って、この粉本を保持し、粉本から学ぶことにより、はじめて土佐派の絵師になることが出来たと云えるのである。また、光起は、同時に「師匠から借り受けた粉本を写す間に、絵画とは何かということに自然に悟るものであり、絵画を絵画たらしめる秘訣が粉本にある」とときえ書き残している。

このような粉本から学ぶという絵画教育の方法は、今日の現代的な芸術観、あるいは近代西欧の芸術思潮から以てすれば、誠に不思議な、奇異な想いに立ち至るが、近世の当時においては至極く当たり前の教育法であり、土佐派以外の流派においてもその正統性を認められていたところである。

例えば、狩野派においてもそれとほぼ同じ現象が伺える。『画道要訣』の著者・狩野安信が、同派の絵画理念を「学画」に求め、生まれながらに会得している才能が生み出す絵画Ⅱ言い換えれば近代的な絵画Ⅱを否定し、「学画」の世界……学んで至ることが出来る絵画、つまり狩野派の粉本を学べば絵画を描くことができる世界……をもって狩野派の指導原理とし、それ以外認めなかったことは有名な話である。

近世の絵師たちは、それぞれの流派独自の粉本から絵画を学び、その粉本を所持することにより、各流派の絵師としての承認を世間から得ることが出来たのである。つまり、本学の土佐派絵画資料は、その多岐に亘る資料内容がそれらを如実に証明していると云って差し支えないだろう。

今回の展示は、われわれ日本人の心の奥底に流れている詩歌へのイメージが生み出した歌神・歌聖の肖像粉本を土佐派絵画資料のなかから選択し、その豊かなイメージを再現してみたいと考えたのである。特に歌聖として人々に親しまれて来た柿本人麿の肖像粉本には種々の形式が存在しており、他の歌聖には見ることができないほどの変化に富んだ人麿像を見出すことができる。そのバラエティあふれる数々の肖像粉本は、柿本人麿に対する日本人の想い入れが創り出したものにはかならないことを推測させてくれるのである。

これらの想い入れが創り出したものについては、大和岩雄氏がその著作『人麿伝説』のなかで、さまざまに柿本人麿の伝説・伝承を紹介してくれている。人麿の「入水伝説」と「若子伝説」・「河童伝説」・「梅若伝説」などとの関係を解き明し、さらに人麿を疫病・厄病除けの神として「人丸弁天」を祀る話(『都名所図会』)や、さらに人麿の「ほのぼのと 明石の浦の 朝霧に 鳴かくれゆく 舟をしぞおもふ」の歌が月経不順など女性の病気に効力を持つと信じられたこと(『法流伝授切紙類集』)など種々の民間伝承を指摘する。

しかし、本学の土佐派絵画資料には、この若者や童子形をした人麿肖像はなく、ほとんど老人の姿をした人麿や翁の人麿像の表現が主となっており、土佐派の絵師たちは、老人や翁の人麿の姿を描くことに集中し、作画を依頼した人々もまたその画姿に満足していたと考えられるのである。

また一方、人麿の「長寿伝説」も早くより成立していたらしく、『古今和歌集』の紀貫之をしてその「仮名序」において、「かのおほん時に、おほきみのくらゐ、かきのもとの人まらなむ、うたのひじりなりける」と記さしめている。「かのおほん時」の

解釈いかんによっては、百歳以上も長生きした人麿も成立するのであるが、さらに「おほきみのくらい」も伝説化された正三位でしかありえないとされているなど、『古今和歌集』成立の時点で、すでに多岐に及ぶ人麿伝説が流布していたのであるう。

これらの「長寿伝説」から、俗人ではない「ひじり」仙の思想につつまれた人麿像が生みだされてきても不思議ではない。本学の土佐派絵画資料のなかにある人麿像が老人や翁の姿に表現されていることも無理からぬことといえる。さらに、神仙思想と結びついた人麿像は、翁であると同時に童子でもあるとされ、翁童のイメージをもった神格化が進められ、住吉明神として描きだされるに至る。

『人丸大明神縁起』（明石・柿本神社）によれば、明石の瀬戸が難所であるので往來の舟の海難を防ぐ神として人麿を祀ると云う。この柿本神社は神仏分離以前には人丸山月照寺の鎮守であったとされ、月照寺には「船乗十一面観音」を大和の柿本寺から勧請している。人麿が海難の守護神と繋がり、さらに航海神として信仰されている住吉明神と人麿とを航海守護という関係によって結び付けて考えることも成立している。

また、渡唐の人麿像の成立ごときは、菅原道真が中国へ渡り、庶民のなかで渡唐天神として信仰を受けたのと同様に、さらに云えば、源義経が蒙古へのがれジンギスハンに生まれ代ったと云う伝承が発生したごとく、人麿に対する人々の溢れるような想いがその姿を創り上げたに相違ない。しかし、この渡唐像の成立については、何時・何処で・誰によって創りだされたのか判然としていない。

本学の粉本は「延宝弐年（一六七四）二月下旬」の年紀をもっており、少なくとも一七世紀の後半には、この形式の像容を渡唐の人麿として求めた人々がいたことは間違いないのである。人々の間で人麿を中国へ渡らせる考え方が何時のころからか芽生え、画像として描くことを土佐派の絵師に求めたのである。いずれにしても、神話的な空間を創りだすエネルギーを柿本人麿は保持していたと、いってよ

いのである。

この人麿像は、中国風の挾息に凭れかかり、右手に筆を持ち、思索する老人に表現され、詩作に耽っている人麿の姿を描いたものと推測できる。人麿を取り囲む空間は船中を表現していると見られ、その墨書には「是ヲ渡唐ノ人麿ト云由入唐有之其時ノ歌……」とあり、中国へ渡航する姿、あるいは渡海後の人麿を表すとも見られるのである。しかし、そこに記録された歌は『万葉集』巻十五にある「天飛ぶや雁を使いに得てしかも 奈良の都に言告げ遣らむ」（三六七六）と遣唐使の歌を記録しており、十七世紀の人々はこの歌をもって人麿の渡唐の歌と考えていたらしいことも知られる。

平安時代末期には、「人麿影供」として歌人たちの間に、人麿の肖像画を掛けて礼拝する一種の儀式が成立していた。

元永元年（一一一八）六条東洞院にあった藤原顕房の亭で行われた人麿影供を、藤原敦光（一〇六一—一四四）の『柿本影供記』において次のように述べている。

「今日は柿下大夫人丸の供也。件の人丸の影は新に図絵せらる所也。一幅長三尺計、着烏帽子直衣。左手は紙を採り、右手は筆を握る。年齢六旬余の人也」（原文漢文）

この人麿のイメージは、かなり早くから成立していたものと思われ、『十訓抄』第四では、すでに粟田讃岐守兼房の夢枕に立った人麿の像をもとに像容が創りあげられている。この兼房視夢像については、『十訓抄』に少し遅れて成立した『古今著聞集』にも記録されるが『十訓抄』では次のように記録する。

「粟田讃岐守兼房といふ人有けり。年比和哥をこのみけれど、宜しき哥もよみ出さざりければ心に常に人丸を念じけるに、あるよの夢に、西さか本とおぼゆる所に、木はなくて梅の花ばかり雪のごとくちりて、いみじくかうばしけるに、心めでたしとおもふほどに、かたはらに年たかき人あり。直衣にうすいろの指貫、紅の下の袴をきて、なへたる烏帽子をして、ゑぼしの尻いとたかくて、常の人にも

似ざりけり。左の手に帟をもて、右の手に筆を染めて、物を案ずるけしきなり。あやしくて誰人にかとおもふほどに、此人いふやう、年比人丸を心にかけてさせ給へる其ころざし深によりて、形を見え奉るなりとばかりいひてかきけち失ぬ。夢さめて後朝に、絵師をよびて此有様をかたりてかかせけれども似ざりければ、たびたびかかせて似たりけるを、宝にして常におがみければ、そのしるしにや有けん、さきざきよりもよろしき哥よまれけり」

この記録からは、人麿の背景描写に、菅原道真のイメージを想起させる梅花が舞い散り、人麿像の上に菅原道真像を大きく重ね合せ、広げるような気配が見うけられる。菅原道真を学問の神として祭祀すると同様に人麿をもって和歌の神として礼拝する慣習が成立しているのである。

あるいは人麿の神格化が先行し、道真の神格化が遅れるのかも知れないが、このように礼拝の対象として描かれる画像の形式も土佐派の絵師たちが創り上げていた。なかでも鎌倉期に似絵の名手として知られる藤原信実が創りだしたと云われる「信実視夢像」は、粉本にみるかぎり、上畳のうえに坐し直衣に烏帽子をいただき、上方をみあげる姿をとるのが、正式の像容であったと考えられる。

上方からは梅の花びらが舞い散り、左手には帟を右手に筆をとる。この人麿の容姿は静かに詩想を練る兼房視夢の像容に合致している。

人麿像の粉本は本学に四十二枚の画像が現存する。そのうち立像が五図、坐像三十七図。寝そべり頬杖をつく気ままな姿の赤人像一図もある。そのほとんどが坐像であることは、坐像をもって祭祀の図像とする伝統が永続してきたことを物語っているのではないだろうか。

だが、現存粉本の年紀のもっとも古い作例は「寛文五年（一六六五）卯月下旬」の墨書であり、あまり古くに遡ることはできない。しかし、兵庫県立歴史博物館所蔵の作品に見られる作例もあり、少なくとも鎌倉末期から室町初期には土佐派の絵師たちによって数多く、礼拝対象として描かれていたことは疑えない事実である。

う。

また、赤鬼が墨を磨り人麿に仕えるユーモラスな図像もあり、人麿に対する人々の想い入れの大きさと広がりを感じ取れるのである。

（京都市立芸術大学教授）

